

<http://fukushimafolklore.jimdo.com/>  
[fukushima\\_folklore1971@yahoo.co.jp](mailto:fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp)

## 平成 30 年度 総会報告

日時：平成 30 年 6 月 3 日（日）14：00～15：00

場所：福島県立博物館 視聴覚室

平成 30 年度福島県民俗学会大会は、福島県立博物館を会場に午前中に研究発表会、午後に総会・公開講演会が開催された。総会では以下の内容が報告、承認された。

### ■役員改選について

平成 30・31 年度の役員について、以下の通り承認された。

- 会 長** 佐々木長生  
**副会長** 岩崎真幸（浜通り）・野沢謙治（中通り）・小沢弘道（会津）  
**事務局** 内山大介（長）・大里正樹・山口 拓（会計）  
**監 査** 大山孝正・相原達郎  
**幹 事** 村川友彦・鎌水 実（以上、中通り）、二本松文雄・丹野香須美（以上、浜通り）、内山大介・大里正樹・山口 拓（以上、会津）  
**顧 問** 田母野公彦・懸田弘訓

### ■会員異動について

平成 29 年度中に 5 名の新入会者があり、2 名の退会者があった。平成 30 年 6 月 3 日現在の会員数は 72 名。また当会会員の鹿野正男氏（郡山市）が平成 30 年 2 月 28 日に、相馬胤道氏（南相馬市）が平成 30 年 1 月 4 日に、それぞれ逝去されたことが報告された。

### 平成 30 年度事業計画

日	事業名	場所
30.04.30	第 1 回幹事会	郡山市労働福祉会館
30.06.03	平成 30 年度大会（総会・講演会・研究発表会）	福島県立博物館
30.08	『ふおーらむ・F』No.8 発行	
30.10（予定）	地域持ち回り研究会（浜通り）	いわき市
	第 2 回幹事会	
30.11.24	第 35 回東北地方民俗学合同研究会	盛岡駅西口アイーナ
31.01	『ふおーらむ・F』No.9 発行	
31.03.30	『福島の民俗』第 47 号刊行	

### ■決算・事業報告ならびに予算・事業計画

事務局より平成 29 年度の決算と事業報告を行い、会計監査より適正な支出であったことが報告されて満場一致で承認された。また合わせて平成 30 年度の予算案ならびに事業計画についても満場一致で承認された。今年度の事業計画は左下の表の通り。（事務局 内山大介）

### 平成 30 年度公開講演会報告

日時：平成 30 年 6 月 3 日（日）14：30～16：00

演題：「はやま信仰の多様性について ―福島県の事例を中心に―」

講師：鈴木昭英氏（日本宗教民俗学会顧問）

鈴木氏は大谷大学で宗教民俗学を学び、大阪市立博物館学芸員・長岡市立科学博物館長・長岡市郷土資料館長を歴任され、現在は長岡市の真宗大谷派長福寺住職を務める傍ら、日本宗教民俗学会顧問・日本山岳修験学会顧問・民俗芸能学会評議員などを務めている。また、研究活動だけでなく、盲目の旅芸人瞽女（ごぜ）の顕彰と芸能の伝承にもご尽力されている。

今回は福島県の事例を中心に、はやま信仰の多様性についてご講演いただいた。はやまの表記は地域によって、「羽山」「葉山」「麓山」など様々なことから、今回は「はやま」と表記されたようである。

はじめに、はやま信仰の概観説明があった。はやまは人里に近く山頂がある程度以上に突き出た形のよい山が多く、山頂にははやま神（はやま権現）を祀り、ふもとの集落民がそれぞれの立場で利益効験をもたらす神として信



鈴木昭英先生のご講演

仰してきたこと、法印（山伏）や神主が祈祷者・指導者となること、祭に携わる者は行屋で精進潔斎して神憑けや火渡りなどを行ったことが説明された。次に、人々が期待するはやまの神観念では、はやまを山の神・作神・氏神等とする多様性の事例が紹介された。はやま信仰は、修験者により憑祈祷や火渡りが根本儀礼となったこと、本山派・当山派・羽黒系・湯殿系それぞれの修験者が真言密教の祈祷に拠りながらも、独自に祭りを組み立てたと思われることが説明され、浜通り・中通り・会津の代表的事例が紹介された。

鈴木氏のはやま信仰調査は50～60年前から続いており、「100年前の事を知っている人から調査できた」と話されていた。また、昭和30年代の各地のはやま祭りの写真も多数紹介された。現在、県内でも特に原発被災地では避難による過疎化が進み、祭りや集落そのものの存続が危惧されていることから、今回紹介された事例や写真は非常に貴重なものといえる。

後日談だが、8月15日に富岡町では震災後8年ぶりに「麓山の火祭り」が行われ、大勢の町民が避難先から駆け付けた。若衆によって山頂に担ぎ上げられた松明は、原発被災地復活の炎として赤々と燃え上がっていた。（会員 二本松文雄）



震災後8年ぶりに現地開催された「麓山の火祭り」（富岡町）

## 研究発表会報告

日時：平成30年6月3日（日）10：30～11：50

### ① 山口 拓氏「会津の飴づくり」

今回の山口氏からは飴に焦点を当てた報告がなされた。飴は古くから食され、現在でも非常に身近でありふれた食品である。山口氏は、そのような飴を菓子屋のような専門家が作る産業としての飴、一般の家庭においてその土地の人々により作られ消費される飴という2つの側面から捉えられた。それにより、産業面においては近代以降の社会状況の変化を、自家生産の飴に関しては食品を自身の手で作ることの意味を通して、食品の持つ意味の多様性を捉えることができるという。また、その過程で山口氏自身も飴作りを実践されており、非常に印象

深いものであった。

会津における飴作りについて、イタカと呼ばれる特定の階層の人びとが専門としていたという事例が紹介されたが、菓子屋が専門として行う商売とはまた別の在り方が示唆されるものである。加えて津川におけるイタカの記述も紹介され、津川の文化と会津地方の文化がリンクするようで興味深い。また、家庭における飴作りについては飴の出来具合を評価し合う飴よばれの事例が紹介された。飴よばれは選択的な結びつきによるコミュニティの形成とも関わりが見られ、ここにテーマとして設定されている食品の持つ意味の多様性の一環が見えるように思える。

儀礼的な食品としての飴についても触れられ、特に正月に飴を食べる理由について、各地の初市で塩と飴が並立して売られる事例から、いずれも食品としての貴重性・重要性の点で共通が見られるという。しかし、飴には塩のような儀礼的な機能はほとんど見られず、ここから飴がより日常的な場面で供されるという民俗的背景が見えるようである。

近代の産業との関わりについては、福島県の飴が内国勸業博覧会において評価が芳しくなかったという記録から、自家製での消費、行事での利用が中心であったため、近代産業としての発展を見なかったと指摘された。

飴のアウトラインを浮き上がらせつつ、食品の持つ意味の多様性、そして、多角的に食品を捉えることの重要性を認識させられた。また、飴という身近な食品だからこそ現れる人びとの心意を探る上での道筋がつけられる内容でもあっただろう。（会員 富田陽介）

### ② 丹野香須美氏「天井に描かれた民俗」

発表者の丹野氏はいわき市の文化財保護審議委員として、いわき市周辺の天井絵についても調査が行われている。美術的価値の最も優れた天井絵としては永平寺傘松閣（さんしょうかく）などが代表的だが、民俗学的見地からの研究実績は乏しいという。

県内では同種の資料として、飯館村の山津見神社の天井絵があり、火災で焼失した天井絵が近年、東京藝大等の協力により復元されて話題となった。山津見神社の天井絵の画題は祭神に所縁のある狼で統一されている。

一方、本発表で扱った天井絵は、描かれた画題が統一されておらず、画題は祭神に関するもののほか、地域の習俗や当時の世相なども描かれる。いわばそこに生きた当時の人々の暮らしの一端を示す絵画資料としても読み解ける点に今回発表者が扱った資料の特徴がある。

主な事例として取り上げたのは広野町折木（おりき）の八雲神社の天井絵である。この神社はかつては特に養蚕の守り神としての信仰を集めていた。この社に納められた天井絵の画題は多種多様である。花鳥画、龍、虎、恵比寿大黒などのほかに、養蚕を描いたもの（掃き立て

などの過程)、身近な景勝地(いわき市久之浜の波立海岸・弁天島など)、中国や日本の歴史的逸話(孟宗、司馬温公、仁徳天皇、桜井の別れなど)、当時の世相を示すもの(日露戦争)などが写真で紹介された。中には少なくとも現地では現在見られなくなった民俗行事(獅子舞や会津万歳など)も描かれており、当時の人々の暮らしをうかがい知ることができる資料と言える。

また「猫の三番叟」という奇妙な画題も描かれていた。発表者はこれを養蚕守護(鼠除け)の猫として読み解いたが、この画題は珍しく、今後の調査研究が待たれる。区画の数が決まっている天井絵は絵馬と違って奉納者も限定されるため、どのような人々が奉納者として選ばれたのか、そしてなぜこうした画題が描かれたのかなど、興味は尽きない。

最後に、発表者からはこうした天井絵は各地にあること、民俗資料としての研究蓄積が少ないため文化財としての認知度も低く、建物自体の改修などに伴って「悪意のない損壊の危機」も進みつつあることなどが示された。(事務局 大里正樹)

### シンポジウム参加記

### 「震災復興における民俗芸能の役割と継承」に参加して

平成30年2月10日(土)、東北大学災害科学国際研究所と郡山女子大学とが主催する学術成果公開シンポジウム「震災復興における民俗芸能の役割と継承」が郡山女子大学で開催された。それぞれの報告者および題目は次の通りである。

#### 第一部 福島県の民俗芸能

1. 一柳智子氏(郡山女子大学短期大学部)  
「民俗芸能の復興力―田植踊りを事例に」
2. 宮口勝美氏(浪江町副町長・室原郷土芸能保存会)  
「震災時における民俗芸能の力」

#### 第二部 民俗芸能と防災・震災復興

3. 小谷竜介氏(東北歴史博物館)  
「文化財化する地域文化」
4. 久保田裕道氏(東京文化財研究所)  
「無形文化遺産の防災という考え方」

まず、一柳氏は浜通り地方の田植踊りを舞踊という観点から考察した。一柳氏は、「芸能の力」は、平常時の踊り手の身体筋肉感覚の記憶にあり、見る側からも視覚的・聴覚的記憶の中に蓄積されてきたとした。災害後は、平常時にその蓄積があったからこそ「芸能の力」として非常時に再覚醒できたと結論づけた。

次に報告した宮口氏は、自身が所属している浪江町の室原郷土芸能保存会を事例に考察を行った。会員は震災後避難を余儀なくされたが、全国各地での公演を機に再結集して芸能を披露することで、郷土芸能は地域の方々をつなぐもの、「地元の芸能だ、俺たちの宝だ」と理屈抜きで誇れるものだと実感したという。ただ、その反面後継者不足という問題を抱えていることもここでは提示

された。

小谷氏は、自身が震災後に行った文化財レスキュー事業から地域文化の文化財化について考察した。小谷氏は、震災によって失われた地域の文化(例:雄勝法印神楽)を文化財という形で保存することで、地域住民に後世に残すべき文化と意識づけすることができるとした。一方で、文化財の保護対象という面からは、文化財が地域から離れても残る、独立した文化財となるという課題も挙げた。これらの両面を質的な民俗文化調査を通して関係性を明らかにしていくことの大切さを提示した。

最後の報告者である久保田氏は、民俗芸能をはじめとする無形文化遺産を防災という観点から取り上げた。久保田氏は、震災によって得た教訓(例:無形文化遺産の被災情報収集が困難)から、無形文化遺産の防災としてその情報の共有化や記録の作成、さらにネットワークの形成が重要になってくると論じた。

全ての報告が終了した後は、コメンテーターの何燕生氏(郡山女子大学短期大学部)と木村敏明氏(東北大学)を交えた総合討論が行われ、非常に活発な議論がなされた。

筆者はいわき市を中心に伝承されている民俗芸能、じゃんがら念仏踊りについて研究を行っている。じゃんがら念仏踊りは、震災後に様々な場面で踊られるようになったが、こうした実態と震災復興における民俗芸能の役割との関係性を紐解く上で、本シンポジウムの報告内容は非常に有意義なものとなった。(会員 齋藤りぼん)



総合討論のようす

### Announce 研究会のお知らせ

#### ◆ 第35回 東北地方民俗学合同研究会

【日時】11月24日(土) 13:00～16:45  
【会場】盛岡駅西口アイーナ8階会議室 803  
【テーマ】行政の民俗調査と報告書を考える

#### ◆ 平成30年度 地域持ち回り研究会(浜通り)

【日時】12月16日(日) 13:00～(予定)  
【場所】いわき市暮らしの伝承郷  
【テーマ】いわき 民俗学のあゆみ(仮)

※会員のみなさまには、いずれも詳細が決まり次第ご連絡いたします。

## コラム 『山口弥一郎伝』の執筆を目指して

初めまして、会員の辻本侑生と申します。私は東京都に生まれ育ち、大学在学時以降、福井県で今なお焼畑で赤カブをつくるむらでフィールドワークを行い、また、東日本大震災で被災した岩手県沿岸地域での民俗調査に携わってまいりました。そして、焼畑や津波に関わる調査研究を進める中で山口弥一郎の名に出会い、その著作を読み進める中で、山口弥一郎という研究者個人に非常に魅力を感じ、その軌跡に関心を持つようになりました。

東日本大震災後、山口弥一郎の名は、戦時中に出版された『津浪と村』の書名とともに一躍有名になりました。しかしご承知の通り、山口弥一郎は三陸に生まれ育ったわけではありません。会津の旧肝煎家の長男として生まれ育った山口弥一郎が、なぜ情熱をもって三陸津波の研究に取り組んだのか、そして、どのような思いを込めて「東北」を語っていったのかは、明治から平成までを生きる一人の知識人としての軌跡を踏まえて、明らかにしていく必要があると考えています。

山口弥一郎は非常に多作な研究者であり、自らの半生についてもしばしば振り返り、活字に残していますが、あまり本人が語っていない部分もみられます。そうした山口弥一郎の知られざる軌跡を追う上では、戦時中・終戦直後が重要な時期のひとつであると思われれます。

例えば、在野の研究者であった山口弥一郎は、昭和15、16年に厚生省の主催する人口問題研究会において研究発表を行っています。さらに昭和17年からは東北帝国大学農学研究所嘱託として、農林省の委託調査研究に従事していたようです。

一方、戦時中も山口弥一郎は岩手県の中学校・高等女学校で教鞭をとり続け、戦争末期には自身の焼畑研究を活かし、食糧増産の一環として生徒たちと焼畑によるソバ栽培を試みましたが、結果としてソバをほとんど収穫することができず、教員、さらに焼畑研究者として責任を感じた山口弥一郎は、終戦後すぐに教職を辞めます(山口弥一郎 1946『山地開発の諸問題』林業(日本林業会)5(8))。そして、2年後に教職に復帰するまで会津の実家で過ごし、そこで経験した様々な葛藤を生々しく吐露しつつも、民俗誌として充実した内容をもつ『会津の農村生活』を著しました。このように、山口弥一郎の戦時中・終戦直後は、国や大学の研究に直接的に携わり、研究者としてのプレゼンスが高まりつつも、教職や生活の中で様々な葛藤を抱えた時期であったと考えられます。

研究者の立場性や社会との関わりが問われる現代にお

いて、地理学と民俗学、在野とアカデミズム、地方と中央、実務と学問との間を行き来しながら、膨大な研究業績を残した山口弥一郎の足跡から学ぶべきことは多いのではないのでしょうか。これから私は、山口弥一郎の重厚な業績と、磐梯町に寄贈されたその膨大な旧蔵資料を読み進め、山口弥一郎の伝記を編み上げる作業を進めていくつもりです。その過程は、『福島民俗』で少しずつ発表させていただきたいと考えております。会員の皆様には、どうかご批判をいただくとともに、山口弥一郎との直接の接点等を持たれた方がいらっしゃいましたら、ぜひともご教示をいただければ幸いです。(会員 辻本侑生)

### ※福島県立博物館の「山口弥一郎調査資料の研究」事業

山口弥一郎氏(1902年-2000年)は旧・新鶴村(現・会津美里町)に生まれ、東北の地理学・民俗学研究に多大な業績を残しました。特に東日本大震災後には著書『津浪と村』(1943年刊)が復刊、その津波と集落移動に関する研究が再び注目を浴びました。また山口氏が残した調査ノートや原稿、写真など段ボール41箱分の旧蔵資料は氏の没後、一括して磐梯町に寄贈され、近年の災害研究の進展もあってこれらの資料への研究者の関心は非常に高まっています。このため、2015年度からは磐梯町と福島県立博物館が協約書を取り交わして、現在も旧蔵資料の整理作業を進めています。



県立博物館での資料整理作業の一コマ(一番奥が筆者)

つづ  
や記

▼今年度最初の『ふおーらむ・F』をお届けします。▼近年は新入会員が増加し、新しい会員の皆様からも多くの投稿をいただきました。感謝申し上げます。▼山口弥一郎氏と直接に接した先輩方も多いのでは。▼世代間の活発な情報交換の場としても活用していければと思います。▼次号は1月刊行予定です。投稿をお待ち申し上げます。(里)

●福島県民俗学会通信誌『ふおーらむ・F』第8号  
●2018(平成30)年9月28日発行  
●編集・発行 福島県民俗学会(会長 佐々木長生)  
●福島県会津若松市城東町1-25 福島県立博物館内  
●事務局:内山大介・大里正樹・山口拓  
●編集担当:大里正樹